〈最優秀〉犀川のほとりで　山岸美晴（やまぎしみはる）　羽咋高１年

「うつくしき川は流れたり・・」

犀川のほとりに立ち、犀星の詩を口ずさみながらその清流をじっと眺めていた。

私は子母澤類（しもざわるい）さんの「文学散歩道」が好きだ。子母澤さんが石川の文学にゆかりのある地を訪れる内容である。今回は室生犀星がテーマで、「ふるさとは遠きにありて思ふもの」で有名な小景異情（しょうけいいじょう）その二が紹介された。私も子母澤さんと同様に最初この詩は、都会から故郷金沢を恋しく読んだものと思っていたが、どうやら違うことに気付いた。「故郷とは遠い地から偲（しの）ぶものであって、帰ってくるところではない。東京へ戻りたい」という内容である。この犀星の複雑な心情に触れ、当時の犀星に何があったのか興味が湧いた。

室生犀星記念館を訪れた。記念館は犀川沿いの犀星の生家跡に建っている。中に入ると吹き抜けの天井まで届く壁一面に犀星が今までに出版した本の表紙が飾られており、その斬新な装飾の仕方と美しさに息を呑んだ。

館内を歩き、犀星を中心とした家系図が目に入った。そこに犀星の生母の名が記されていなかったことに驚いた。犀星は私生児として生まれ、誕生と同時に生家近くの寺に引き取られたのだった。しかも、生母は犀星が幼いころに姿を消している。犀星の自伝が含まれている小説「幼年時代」には養母の目を盗み、生母に甘える少年の姿があったが、あれは犀星の理想が書かれていたのかと思うと、切なくなった。館内の資料にはさらに、「養母や世間から受ける理不尽な視線があった」とあり、そこで初めてあの詩の背景が見えた気がした。犀星には、故郷にいながらもずっと孤独さや満たされない思いがあったのだ。

私はこの時の犀星の心情を胸に、犀川を見たいと思った。雨宝院前から大橋を渡り、川沿いを進んだ。夏のうだるような暑さを紛らわそうと、川のせせらぎに耳を傾けながら歩いた。周辺の風景を眺めていると、犀川には胸がすくような清らかさや開放感があることに気付いた。なるほど、きっとこの犀川が犀星のつらい境遇や孤独感などを丸ごと包み込み、それをずっと癒やしてくれていたのだろう。

そんなことを考えながら歩みを進めていると、御影石（みかげいし）で流し雛をかたどった犀星の文学詩碑を見つけた。碑にはあの小景異情のその六にあたる「杏の詩」があり、「あんずよ花着け　あんずよ燃えよ」と刻まれていた。春を待つ詩ではあるが、そこに犀星の作家としての花を咲かせようとする気概が読み取れ、思わず笑みがこぼれた。小景異情は悲しみに暮れる詩だけではなかったのだ。

帰路に就く私は、犀川のほとりを歩く犀星に思いを馳せ、杏の花が咲く頃にまたここを訪れたいと思った。